

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS No. 158 November 2019

研究の最前線

◆ 2019 年度冬期国際シンポジウム ◆

《帝政ロシアの地方再訪：文学的想像力と地政学》開催予告

ロシア帝国論が定着した今となつては、地方を研究することの重要性は疑いなく見えるかもしれません。しかしこれまでの地方の研究は、帝国の多様性を調整する仕組みに関心を集中させるあまり、中核と辺境の関係性を軸に展開してきたように思われます。つまり、地方は中央との関係でのみ意味付けされてきたのではないのでしょうか。また、国家権力との関係のみが地方の歴史を形作ってきたことを前提にしてこなかったのでしょうか。この間、帝国各地の空間表象の問題もさかんに議論されてきましたが、それはロシア人のロシア語による表現の分析に偏ってこなかったのでしょうか。そうした議論の中に、ロシア人やロシア語以外の見方がどれほど真剣に取り込まれてきたのでしょうか。今回の冬期国際シンポジウムでは、ロシア帝国の多様な人々が描いた文学的・地政学的な想像力に着目することで、新しいロシア史研究の方法を模索するものとなります。

今回は、モスクワの高等経済学院（HSE）で展開している国際研究プロジェクト「ロシアの地方史」（研究代表者：エカチェリーナ・ポルトゥノヴァ教授）[<https://www.hse.ru/rrh/>]と共催で、ロシアの地方で活躍している研究者を多くお招きしておこないます。したがって、会議の言語はロシア語を主とし、英語を補助言語とします（報告は第4セッションのみ英語）。[長縄]

帝政ロシアの地方再訪：文学的想像力と地政学

2019年12月12日（木）～13日（金） 使用言語：ロシア語、英語（通訳なし）

会場：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター4階大会議室（403室）

12月12日（木）

開会のあいさつ 13:00-13:15

第1セッション：想像される地方 13:15-15:45

エカチェリーナ・ポルトゥノヴァ（HSE）「辺境としての中央ロシア：帝政期における歴史地理の表象モデル」

ナタリヤ・ゴルスカヤ（スモレンスク国立大学）「スモレンスク県貴族の回想にみる19世紀ポーランドとポーランド反乱」

セルゲイ・リュビチャンコフスキー（オレンブルグ国立教育大学）「文民知事の報告書にみるオレンブルグ地方：19世紀末から20世紀初頭」

アナトリー・サフチェンコ（ロシア科学アカデミー極東支部歴史・考古学・民族誌研究所）「ロシア極東の地政学的神話」

討論者：青島陽子（神戸大学） 司会：デイヴィッド・レインボウ（ヒューストン大学）

第2セッション：宗教的想像力の中の地方 16:00-18:00

ダリウス・スタリユナス（リトアニア歴史研究所）「心象地理の中の北西地方：帝国官僚と非支配的民族・宗教集団を中心に」

長縄宣博（SRC）「過去から未来へ？蒸気と印刷の時代のザカスピ地方とブハラへの旅」

ニコライ・ツイレンピロフ（ナザルバエフ大学）「シャンバラとしてのモスクワ：あるプリヤート僧の見た 1896 年の戴冠式」

討論者：ロザリヤ・ガリボヴァ（ナザルバエフ大学 / SRC） 司会：青島陽子（神戸大学）

12月13日（金）

第3セッション：変わりゆく文学的想像力 10:00-12:00

エヴゲニー・ドブレニコ（シェフィールド大学 / SRC）「善良なロシア人に何で支払おうか：スターリン期の映画にみる民族文化の規範と革命前の過去の生産」

エレナ・ペンスカヤ（HSE）「18世紀末から1830年代のロシア語の旅行記にみえる『帝国の裏庭』の概念」

鳥山祐介（東京大学）「18世紀末から19世紀初めの文学におけるロシア帝国像」

討論者：安達大輔（SRC） 司会：宮川絹代（札幌大学）

第4セッション：中央アジアにつきまとう「グレートゲーム」13:30-15:30

塩谷哲史（筑波大学）「ヒヴァにおけるグレートゲームと奴隷制廃止論：19世紀中央アジアにおける英露の競争」

小野亮介（早稲田大学）「1930年代に日本人がどのようにグレートゲームに参入しようとしたか？ スルタンベク・バフティヤールの軌跡から」

ノズィマ・ダヴレトヴァ（ウズベキスタン世界経済外交大学）「小さき者のグレートゲーム：ウズベキスタンのカリモフ時代の壮大な幻想」

討論者：ディビッド・ウルフ（SRC） 司会：長縄宣博（SRC）

第5セッション：帝国の黄昏と黎明における地方の想像力 15:45-17:45

ハリト・ドゥンダル・アカルジャ（ナザルバエフ大学）「第一次世界大戦時のクルド人：オスマン帝国とロシア帝国の狭間で」

ヘンナディー・コロリョフ（ウクライナ国立科学アカデミー歴史研究所 / SRC）「ルーシの土地を求めて：小ロシア運動活動家の描いたウクライナ（1917年から1919年）」

デイヴィッド・レインボウ（ヒューストン大学）「向こう岸からの革命：1920年代のシベリア地方主義者」

討論者：宇山智彦（SRC） 司会：エカチェリーナ・ポルトゥノヴァ（HSE）

◆ Border Studies Summer School 2019 開催される ◆



講義のようす

中心となって学生の募集や講義をおこなっております。今年で通算4回目となり、NoA-SRCとしては恐らく最後のサマースクールでもありました。

講座全体のテーマは“Prospects for the Future of Northeast Asia: From the Perspective of Area & Border Studies”であり、このテーマに沿って境界研究、地域構築、日本の国境、海の境界、文化人類学、国際関係、移民とジェンダー、国境観光の8つの講義がおこなわれました。講師はメンバーの他、シンガポール、インド、フィンランドから各分野のエキスパートを招聘しました。聴講者はニュージーランド、韓国、中国、フィリピンなど多様な国・地域の大学院生20名の他、本学の学生も聴講に訪れ、2日間の延べ聴講者数は40名を超えました。NoA-SRCは引き続き、様々な取り組みのなかで北東アジア地域研究の若手育成に力を入れていきます。[加藤]



受講証授与のようす

◆ JIBSN 礼文セミナー開かれる ◆



セミナーの様相

2019年9月21日、北海道・礼文町で境界地域研究ネットワークJAPAN (JIBSN) の年次セミナーが開催されました。70名もの参加者があり、北海道内では稚内、根室、標津から、道外では対馬、五島、与那国、竹富から自治体関係者が集まり、境界地域の交通について議論しました。とくに喫緊の問題として、サハリン航路が休止となった稚内、北方領土での共同経済活動が進まない根室、日韓関係の悪化で韓国人旅行者が激減している対馬からの最新報告をもとにおこなわれた議論は、まさにJIBSNならではのものとなりました。議論の様相はJIBSNレポートとして後日、公開されますが、セミナーのホスト役となった礼文町のみなさまには心よりお礼申し上げます。また稚内市、利尻町、利尻富士町のご支援により実現したボーダーツーリズム(9月20-23日)も好天に恵まれ、40名を超える参加者がサハリンやモネロン島の近さを感じ、宗谷の「砦」と「ゲートウェイ」の歴史を堪能しました。[岩下]



盛況なツーリズム

◆ 総合博物館展示「ボーダーツーリズム」リニューアル ◆



展示の様様

境界研究ユニット（UBRJ）は、北海道大学総合博物館（2階ブース）でおこなっている展示内容をリニューアルしました。今回のメインコンテンツは、北海道大学出版会から刊行されたばかりの『世界はボーダーフル』。北米、欧州などのボーダーワークの実例や領土をめぐる表象問題などに切り込んでいます。また常設コーナーとなった稚内市在住の写真家・斉藤マサヨ

シ氏による「世界の端っこ」展も好評です。日本中の境界地域の素晴らしい写真をお楽しみください。ボーダーツーリズムの解説パネルでは、中露国境、稚内とサハリンのアップデート報告が展示されています。もちろん、センターが誇る地球儀と北緯 50 度国境標石レプリカも健在です。総合博物館は、月曜を除く毎日 10 時から 17 時まで（6～10 月の金曜は 21 時まで）開館しております。https://www.museum.hokudai.ac.jp/ [岩下]

◆ 北極域の持続可能な開発に関する 2 会合が開かれる ◆



持続可能な開発に関する北方フォーラムの垂れ幕

9 月 23 日から 27 日にかけて、ロシア、サハ共和国のヤクーツクで「持続可能な開発に関する北方フォーラム」（Northern Sustainable Development Forum）が開かれました。この組織は、2015 年 9 月の国連サミットで採択された「持続可能な開発目標」（SDGs）を受けて、北極域の諸問題に取り組む NGO 組織「北方フォーラム」と、北極大学（UArctic）のイニシアチヴのもとに、サハ共和国のヤクーツクに本拠を置く常設組織として発足したものです。本会合はその旗揚げとなるもので、北東連邦大学やサハ共和国科学アカデミーなど複数の機関を会場として、5 日間のプログラムでおこなわれました。ヤクーツクは北極とアジアを結ぶ地点にあることから、新しい組織にはアジア諸国の関係者に対する北極域への窓口としての役割も期待されています。本会合にも中国、韓国、日本から多くの参加者が参加し、それぞれ独自のセッションを設けて、自らの問題意識を表明しました。また、10 月 4 日から 6 日にか

けて、北方の持続可能な開発に関する共同研究会合（1st Joint Research Laboratory Meeting on Sustainable Development of the North）が、北海道大学大学院地球環境科学研究院で開かれました。東ユーラシアに重点を置く北方および北極域の炭素・水・エネルギーバランスと気候の国際シンポジウム第 10 回大会を兼ねる本会合には、シベリアの永久凍土や気候、植生、生態系を専門とする国内外の研究者が一堂に会して、研究成果の報告や意見交換をおこない

ました。これら2つの会合に、スラブ・ユーラシア研究センターから田畑と後藤が参加し、COPERA（ロシア北極域東部における永久凍土上生態系の炭素予算の研究）や北極域研究推進プロジェクト（ArCS）を通じて得られた研究の成果を報告しました。[後藤]

◆ 専任研究員セミナー ◆

ニュース前号以降、専任研究員セミナーが以下のように開催されました。

7月30日：長縄宣博“Tatars at Imperialist Wars: From the Tsar's Servitors to the Red Warriors”

コメンテータ：青島陽子（神戸大学）

提出されたペーパーは、内戦期のムスリムを扱う3部作の第1部になるというもので、大変意欲的なものと見受けました。この第1部は、ヴォルガ＝ウラルのムスリムについて露土戦争からロシア革命までの時期を通時的に見たもので、そのようなものとしてもこれまでに例のないものだとの説明でした。コメンテータのまとめに従えば、信教集団としてのヴォルガ＝ウラルのムスリムが無信教・民族を基本とするポリシェヴィズムになぜ共鳴していったのかを明らかにしようとしたもので、それを1874年に導入された兵役（皆兵制）の視点から捉えようとしたものでした。内容としては、当時の新聞等に発表された従軍した者の報告などを丁寧に紹介するものでした。討論のなかでは、ムスリムの政治的主張を、戦争を経験したという観点からだけで説明できるのか、タタール人の仲介者としての役割を過大評価していないか、帝国の他の非ロシア人との違いはどのようにして生じたのかなど、たくさんの質問やコメントが出され、議論が大いに盛り上がったように感じました。[田畑]

9月12日：ウルフ、ディビッド“Russia and the Japanese Empire until 1945”

コメンテータ：池田嘉郎（東京大学）

提出されたペーパーは、インターネット上のアジア百科事典のために書かれた原稿ということでした。報告者からは、日露の関係史を日本人でもロシア人でもない者が執筆することは、バランスを取るという意味ではよいのではないかと発言が冒頭にありました。コメンテータからは、センターなどを中心におこなわれてきた近年の帝国研究の成果を取り入れていること、満洲に関する記述が中心的位置を占めていることが大きな特徴であるとの指摘がありました。確かに、トランスボーダー的な現象に関する記述が多く、また、両国の関係史が東アジア全体の歴史の文脈で描かれているなど、センターの最近の傾向が色濃く出ているような印象を受けました。討論のなかでは、朝鮮人の役割をもっと書くべきでないか、明治維新をどう位置付けるのか、2つの帝国の間には拡大の時期やそのやり方など大きな違いもあるのではないかと、日本帝国の最盛期はいつなのかなど意見や質問が出されました。日露関係史はセンターにとって最重要テーマの一つであり、多くの教員が関心を持っていることが再確認できたセミナーでした。[田畑]

9月13日：田畑伸一郎「ロシア経済の強さと弱さ」

コメンテータ：上垣彰（西南学院大学）

今回のペーパーは、6月に開催された比較経済体制学会での報告を基にしたもので、同学会の学会誌『比較経済研究』に掲載が予定されているものです。ここではロシアの経済の強みとして豊富な資源、財政制度、強固な中央集権制度があること、および弱みとしてオランダ病による製造業の不振、低い投資率、不十分な経済開放があることが示された上で、今後のロシア経済は当面は1～2%程度の成長を続けることは可能であるが、プーチン政権が目標とする3%の成長は難しいのではないかと議論が提起されました。コメンテータの

上垣氏はこの議論に対して、ロシアの資源や財政制度の「強み」の持続性や、石油・ガスに集中投資がなされない理由、あるいは中国と異なりロシアが為替操作をおこなわない理由などについてコメントをおこないました。フロアからは、強さと弱さの「両面性」と「主観性」、旧ソ連との違い、ロシア国内の研究者の現状分析と発言、石油価格の上昇と家計の関係、ロシアのオランダ病の「先天性」などについての議論が提起されました。ロシア経済の現況を知ることのできる、有益なセミナーとなりました。[仙石]

◆ ヤヴォルスカ・オクニンスカ氏の研究滞在 ◆



2019年9月1日から30日まで、本学が交流協定を結ぶワルシャワ大学歴史研究所博士課程に所属するマルタ・ヤヴォルスカ・オクニンスカ (Marta Jaworska-Oknińska) 氏が研究滞在をおこないました。ヤヴォルスカ・オクニンスカ氏は、2009年にセンターで外国人研究員を務めたダリウシュ・コウォジェイチック (Dariusz Kołodziejczyk) 氏の教え子で、17世紀のロシア史を専門としています。博士論文の執筆は終わり、残るは口頭試験と論文審査であるため、博士課程後の研究の方向性を決めるために、コウォジェイチック氏の提案を受けセンターで研究交流および資料収集に従事しました。9月27日には“Service and Corporate Identity in the Provinces: Collective Petitions and Muscovite Political Culture in the 17th Century”という題目で研究報告をおこないました。[野町]

札幌ラーメン横丁にて。初めてのアジア滞在でした

◆ 研究会活動 ◆

- ニュース 157号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。[大須賀]
- 7月17日 北海道スラブ研究会 岡部芳彦 (神戸学院大) 「体験的ウクライナ論：エピソード2 ウクライナ正教会独立問題・最高会議選挙・オリガルヒから北方領土まで」
 - 7月31日 「スラブ・ユーラシア地域を中心とした総合的研究」報告会 佐藤嘉寿子 (帝京大) 「ポストネオリベラリズムの視点からみたハンガリーの現況」；永山ゆかり (釧路公立大) 「シベリア先住諸民族の言語資料から見た社会と親族」
 - 8月6日 北海道中央ユーラシア研究会第134回例会 風戸真理 (北星学園大) 「現代ノマドの移動の諸相 その1：ブリヤートの亡命と帰還を中心に」
 - 9月11日 菅原彩 (早稲田大・院) 「コズロフ『修道士』の出版前の普及の可能性：ベリンスキーの見解の批判的検証」(中村・鈴川基金奨励研究員報告会)
 - 9月25日 鳥飼将雅 (東京大・院) 「集権化人事のジレンマ：タンボフ州、ケメロヴォ州、ノヴォシビルスク州におけるソ連崩壊後の州権力＝市郡権力間関係」(中村・鈴川基金奨励研究員報告会)
 - 10月2日 第31回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 田畑伸一郎 「プーチンのロシア経済は磐石か？」

- 10月5日 北海道中央ユーラシア研究会ワークショップ『14世紀の危機』を問う：文理『融合』ではなく『協働』のために」（詳しくはエッセイ参照）
- 10月22日 共同研究班「スラブ・ユーラシア地域におけるメディア文化史の共同研究」セミナー Nikolai Gus'kov（サンクトペテルブルク国立大、ロシア）、Andrei Kokorin（同）「1920-30年代ソ連における映画と文学：相互作用の諸段階と全般的傾向」
- 10月24日 濱田武士（北海学園大）「日口漁業関係と北方領土」（NIHUセミナー）

人事の動き

◆ 事務職員の異動 ◆

中嶋 奏子	事務補佐員	2019年10月1日採用
笹谷 めぐみ	研究支援推進員	2019年9月30日退職
五十嵐 麻美	事務補佐員	2019年10月1日学務部国際交流課へ配置換〔事務係〕

中央アジア 1916年反乱に関する国際共同研究に参加して

宇山智彦（センター）

過去数年間、第一次世界大戦やロシア革命に係る出来事の百周年を記念する企画・催しが相次いだ。中央アジアの場合、戦時労役の命令に対して起きた1916年反乱の百周年が、重要なものの一つであった。2016年にはいくつもの国際会議が開かれ、論文集や史料集も次々と刊行された。百周年を機にヨーロッパの研究者主導で編集され、中央アジア・ロシアの研究者や私も寄稿した国際的な論文集は、つい先日刊行された⁽¹⁾。

そして百周年が過ぎてからも、研究を続ける動きが見られた。その中でも代表的なものが、2016年のピシケク（中央アジア・アメリカ大学）での国際会議の共催者でもあったアイギネ文化研究センターが2018年に開始した、“Mobilizing academic communities in Central Asia to produce new knowledge about the 1916 Uprising and to build shared academic platforms for exchanging and disseminating knowledge about ethnically or/and politically sensitive topics”という長い名前のプロジェクトである。アイギネは2004年に設立されたクルグズスタン（キルギス）の小規模な民間組織だが、同国の聖地や伝統文化、メディア、ジェンダーなどさまざまなテーマの研究プロジェクトや教育プログラムを精力的に実施してきた。今回のプロジェクトのタイトルからも、純粋な歴史としての1916年反乱研究だけでなく、異なる国の研究コミュニティの結合による知の形成、政治的に微妙なテーマの取り扱いといった問題意識が分かるだろう。

1916年反乱が政治的に微妙なテーマであるというのは、一般に中央アジアでは歴史研究に政治的な制約やバイアスがかかりがちであることに加え、ロシア帝国政府に対する反乱とその苛酷な鎮圧、中央アジア現地民（特にクルグズ人）とロシア人入植者の衝突という問題に

1 Aminat Chokobaeva, Cloé Drieu, and Alexander Morrison, eds., *The Central Asian Revolt of 1916: A Collapsing Empire in the Age of War and Revolution* (Manchester: Manchester University Press, 2019).



反乱の舞台の一つ、ポーム渓谷に立つモニュメント

ついで、旧ソ連地域での影響力を保とうとする現在のロシアも、多民族の共存を課題とする中央アジア諸国も、神経質になりがちであることに由来する。2016年には、クルグズスタンのごく一部の人がロシア帝国による鎮圧をジェノサイドと呼んだのに対し、ロシアの研究者や政府関係者が過剰なほど強く反論する場面がしばしばあり、私もモスクワの会議などで目撃した。それでも、中央アジアの他の国々がこの反乱を記念することに消極的な姿勢だったのに対し、

反乱当時最も悲惨な事態を経験したクルグズスタンで、百周年の際もその後も積極的に研究が続けられてきたのは、中央アジアの中で最も政治的自由度が高いこの国ならではのことである。

このプロジェクトの特徴の一つは、公募によって中央アジア各国から参加者が集められたことである。期間中に多少の出入りがあったが、一貫して参加した研究者は、クルグズスタン6人、ウズベキスタン3人、カザフスタン3人、タジキスタン2人であった。トルクメニスタンから参加者を招くことにも努力が注がれたが、結局実現しなかった。1916年のトルクメン人の反乱とその鎮圧は、ロシア帝国とイランの国境を跨いで行われた非常に興味深い現象なのだが、トルクメニスタンの政治状況のために研究が進まないのは残念なことである。

プロジェクトのさらに大きな特徴は、中央アジア域外の研究者をアドヴァイザーとして加えたことである。アレクサンダー・モリソン（イギリス）、アミナト・チョコバエヴァ（オーストラリア。クルグズスタン出身）、アリ・イーメン（アメリカ。トルコ出身）、カトリーヌ・ブジョル（フランス）、セルゲイ・ウシャキン（アメリカ。ロシア出身）、ネイサン・ライト（スウェーデン。アメリカ出身）の各氏と私の7人である。アドヴァイザーは、中央アジアからの参加者に直接アドヴァイスをするほか、会議では自分でも発表をし、またプロジェクト全体や会議の運営についても意見を求められることが多かった。なお、モリソン氏がスラブ研の元外国人研究員であるほか、私はチョコバエヴァ氏の博士論文審査に参加し、ブジョル氏の本を訳したことがあるなど、アドヴァイザーの多くとは以前から縁があった。中央アジア近代史研究は狭い世界だから当然といえば当然だが。

初回のワークショップは2018年3月末から4月初めにかけてビシケクで開かれ、アドヴァイザーは主に比較の観点から1916年反乱の研究方法を論じ、中央アジア側参加者は各自の研究構想・アイデアを発表した。私は中国（清・中華民国）におけるムスリム反乱の歴史を取り上げ、黒岩高氏や新免康氏の研究に依拠しながら、宗教的・民族的対立の構図、地元有力者・知識人と帝国権力の関係や反乱における彼らの役割、噂や暴力というファクターなどにおいて1916年反乱との共通性と相違が見られること、中国での反乱にロシア帝国・ソ連のムスリムが参加したりソ連の存在が影響を及ぼしたりした例が少なくないことを指摘したうえで、1916年反乱の課題を提示した。中央アジアでは中国史の知識はあまり普及していないため、中国ムスリムの反乱についての話は参加者に新鮮に聞こえたようであった。

中央アジア側参加者は、1916年反乱に関する研究に既に長く携わっている人から、これから始めるという人までさまざまであったが、研究方法や着眼点の明確な発表がいくつもあり、頼もしく思った。議論の進行を取り仕切るアイギネのセンター長、グルナラ・アイトバエヴァ

氏は文学・民族学が専門で、歴史学者ではないのだが、発表の問題点を指摘し、議論を整理して盛り上げる手さばきは見事で、その後の会議でもいつも感心させられた。

発表が一通り終わり、今後の研究の進め方と成果のまとめ方についての議論が行われた後、参加者の希望を聞きながらアドバイザーの割り当てが決められた。私をアドバイザーにしたいという人が最も多かったが、なるべく均等に割り振る必要があること、多くの参加者を引き受けるときめ細かいアドバイスができなくなってしまうことから、申し訳ないと思いつつ2人に絞らざるを得なかった。

その後、参加者とアドバイザーがメールのやりとりをしながら研究を進めた後、2018年7月には早くも、中間成果を話し合う第2回ワークショップが開かれた。会場としては、1916年に最初に反乱が始まったタジキスタンのフジャンドなど、中央アジア南部の都市も候補に挙げたが、7月には暑すぎるということで、クルグズスタンの誇る避暑地であるウスク湖（イッスイク・クリ）北岸で開くことになった。



美しいウスク湖（イッスイク・クリ）

私は今度は、「われわれはいかなる遺産を拒否するのか？」⁽²⁾ ソヴィエト史学のプラスとマイナス」というタイトルで話をした。初回のワークショップで、参加者の研究手法・発想にはソ連時代から無意識的に引き継いでいる要素が多いと感じたためである。報告では、ソ連時代の歴史研究には体系性・実証性の面で評価すべき点が少なくないものの、図式的な分析手法（1916年反乱については、「原因」と「きっかけ」の図式的な区別）や、歴史的事象・人物を善悪の二分法で評価する態度、ある集団や個人の行動・性質が民族や階級などの属性によって規定されるという本質主義的な見方などのマイナス面があり、克服すべきであると述べた。本質主義との関係で特に問題なのは、反乱者の行動の偶発性や利害の多様性、民族意識の強弱などを考慮せずに、反乱を「民族解放運動」と名づけて思考停止してしまうことである。この報告自体に対する参加者の反応は好意的だったが、その後の参加者の発表では、「民族解放運動」という言葉を安易に使うなど、ソ連的な発想がやはり随所に見られた。本質主義や善悪二分法は、ソヴィエト史学の特徴であると同時に独立後の民族主義史観の特徴でもあるので、克服が容易ではないことが改めて実感された。

それでも参加者の発表には、わずか数カ月でかなり研究が進展したことを示すものが少なくなかった。ただし、議論に影を落としたのは陰謀説であった。参加者の一人Jさんは、初回ワークショップの際に、1916年反乱はオスマン帝国、ドイツ、中国といった外部勢力の煽動によって起きたという見方を唱え、私を含むアドバイザー陣から批判を受けたのだが、第2回でも基本的に考えを変えていなかった。さらにプロジェクト参加者ではないが希望して出席した人がドイツ陰謀説を強く主張し、発言を抑えようとした主催者側とのあいだで少々陰鬱な雰囲気になった。ロシアや中央アジアでは、近年の反欧米感情と連動して、歴史や国

2 このタイトルはレーニンの著作から借りたものである。もちろん、レーニンがナロードニキ批判のために捻りを入れたレトリックに則っているわけではなく、ソヴィエト史学の遺産の悪い部分を拒否しようという意味で使ったのだが。



遊覧船で船長のような格好をするQさん
(中央)

際政治を陰謀論で説明しようとする傾向が見られるが、特に1916年反乱の場合、外国勢力の煽動が原因なのであればロシア人と中央アジア人の対立という色彩を薄めることができるので、陰謀説が受け入れられてしまう素地が存在するのである。

このように若干の問題含みの第2回ワークショップではあったが、涼しく風光明媚なウスク湖岸は快適で、冴えた頭で議論ができたし、プロジェクト関係者の親交も深まった。新疆出身のカザフ人Qさんは、ロシア語がほとんど話せないため議論に入れずにいたが、宴会では得意の歌を披露するなど盛り上げ役になった。遊覧船に乗った時は多くの人が湖に飛び込み、特に恐らく最年長のイーメン氏はすばらしい泳ぎを見せた。もっともウスク湖は静かな湖である割に水難事故の多いところで、私たちの滞在中、同じ保養所のビーチでクルグズスタンの有名な若手ジャーナリストが溺死したと聞いた時は、背筋が凍る思いがした。

第2回ワークショップ後の10カ月は、メールでやりとりしながら研究を進め、成果をまとめていくことが主な作業となった。中央アジア側参加者の中には、勤務する大学での教育負担が重い、外国によく行くなどさまざまな事情の人がいて、作業が遅れがちな場合もあったが、ここでもアイトパエヴァ氏をはじめとするアイギネのスタッフが効果的なタイミングで連絡を入れることでペースが維持された。

各自の成果が概ねまとまった2019年5月末・6月初めに、全員が集まる機会としては最後となるシンポジウムが、ウスク湖東方のカラコル市で開かれた。ピシケクを12時頃に貸切バスで出発してから、反乱にゆかりのある場所などにいろいろ寄り道しながら行ったため、カラコルに着いたのは夜の8時近くになっていたが、同じウスク湖岸地域でも西の方はやや乾燥した風景なのに対し、東に行くにつれ緑が濃くなるなど、車窓観察も飽きなかった。



反乱者たちの襲撃対象となった修道院の跡に建つ教会
(ウスク湖北東岸)

プロジェクトの中のいくつかのグループは、反乱に関する地図の作成、反乱後に中国に逃れたクルグズ人難民の子孫へのインタビューやフジャンドの反乱関連史跡の探訪に基づく記録映画の製作などに携わっていたのだが、プロジェクト会場の入口ではそれらの成果が披露されていた。シンポジウムにはプロジェクト関係者だけでなく、クルグズスタンの長老的な歴史家たちなど多くの人が参加し、開会式では子どもたちが民族楽器を演奏するなど、にぎやかであった。

シンポジウムでは多くの興味深い研究成果が発表されたが、特に快い驚きであったのは、Jさんが以前の主張を一変させ、中央アジアとその周辺で外国勢力が活動してはいたものの反乱への影響はわずかだったと報告したことである。適切なアドバイスのもとで史料を読み込むことにより、偏った歴史観を克服できるという模範的な例であった。

ただしその代わりにと言うべきか、別の陰謀説がこのシンポジウムで大々的に発表された。クルグ



シンポジウムの開会式で楽器を演奏する子どもたち

ズスタンの在野の歴史愛好家で、1916年反乱に関する史料を意欲的に収集・発表しているV氏が基調講演をし、労役は最初から反乱を起こさせて懲罰として土地を収用する意図で、農業省移民局の役人が発案したものだと言ったのである。労役命令が出た後で地方当局の役人やロシア系移民が挑発的な発言や行動をし、現地民の反乱を煽動したという説は昔からあるが、労役を命ずる勅令そのものが土地収用を目的として出されたというのは、陰謀論の性質が格段に高い説である。V氏が根拠とした文書は、確かにこれまで注目されてこなかった興味深い史料だが、政策決定過程上の位置づけが全く不明であるし、陰謀そのものが書かれているわけではなく、違う文脈での解釈が十分可能なものである。従ってV氏の説は全く論証が成り立っていないのだが、これを聴いたクルグズスタンの人々の中には有力な説として受け止める雰囲気が高く、私は危機感を抱いた。

シンポジウム後は、最終成果刊行に向けた作業が続いている。私は、V氏の説を中心に陰謀論を批判する論説を書いた。従ってプロジェクトはまだ完全に終了してはいないが、この2年半あまりの歩みを振り返ると、感慨深い思いがする。比較的短期間のプロジェクトでありながら、1916年反乱の諸相、特に細かい地方単位での動きや個々の指導者の役割に関する研究がかなり進んだ。論文集が未刊行なので個別の成果にここで触れることは避けるが、オーラルヒストリーの手法やマイクロヒストリーの視角を用いた研究に優れたものが多かったように思う。そして、研究の精度向上と視野の拡大には、中央アジアの4か国の研究者たちと域外からのアドバイザーが集まって意見交換をするというフォーマットが有効性を発揮したし、それが外部主導ではなく、中央アジア現地の研究機関がコーディネートして行われたということにも、大きな意義があった。

ただし同時に、限界も感じられた。ソヴィエト史的な方法・発想を安易に用いたり、陰謀論に流れたりする傾向は、私たちアドバイザーがかなり強力に修正しようとし、ある程度の効果はあったが、大幅に改まったとは言えない。また参加者たちのペーパーの中には、典拠を明示せずに先行研究の記述を長々と引用したのがあり、私たちが気づいて慌てて修正を求める場合があった。旧ソ連諸国、特に中央アジアでの論文執筆モラルの緩さは、改善されるべき問題であり続けている。

国際的な研究の基準が中央アジアに浸透しにくいという問題と並んで、欧米など域外の研究者コミュニティが現地の研究者の成果をどのくらい取り込んでいるのかという問題もある。今回のプロジェクトの成果を発表する重要な場の一つとして、2019年10月にワシントンで開かれる中央ユーラシア学会（CESS）年次大会が想定され、パネルの申請も通っていたのだ

が（私が討論者になる予定だった）、報告者たちはヴィザが出なかったり旅費の補助を受けられなかったりして誰もアメリカに行くことができず、パネルは流れてしまった。このように中央アジア現地の研究者は物理的に欧米に行きにくいという問題と、欧米的な論文の書き方を身につけていないと英語圏の雑誌に投稿しても門前払いされてしまうという問題、そして欧米の研究者自身が英語で議論できる相手を好むという問題が相まって、欧米中心の国際的研究者コミュニティは、欧米の大学・研究機関で働く中央アジア出身の研究者には入りやすくても、現地の研究者にはやや参入しにくいものになってしまっている。

似た問題は日本でも生じており、たとえばスラブ研の外国人研究員プログラムでも、スラブ研が単独で選考できず全学の委員会による判断が入る現行のシステムでは、英語の業績が少ない研究者は優れた研究をしていても採用されにくくなっている。確かに著書・論文の水準としては、欧米・日本の研究者や欧米で活躍する中央アジア出身の研究者と比べて、現地の研究者がやや見劣りしがちな傾向があることは否定できない。しかし資料集や通史の刊行といった研究の基礎的な部分を主に担っているのは現地の研究者なのであり、彼らを抜きにした地域研究・歴史研究は底の浅いものになってしまうだろう。

現在進んでいる学問のグローバル化は、自然な流れに任せておくと、英語および欧米的な研究作法を身につけていない研究者を排除する効果を持ってしまう（日本の研究者も、その意味では決して有利な立場にはいない）。そのような流れを是正するためには、国際的な研究の基準や方法を旧ソ連諸国に広めていくと同時に、欧米・日本の側も、自分たちの基準を多少柔軟にしても現地の研究者を取り込んでいかなければならない。今回のプロジェクトにせよ、スラブ研のさまざまな研究事業にせよ、たとえ個々の成果はささやかであっても、一歩一歩努力を積み重ねていくことに意義があると考えたい。

「14世紀の危機」ワークショップから考える文理協働

原田央（東京大学大学院工学系研究科修士課程）

序に代えて：諫早庸一（センター）

10月5日（土）、当センターにおいて北海道中央ユーラシア研究会ワークショップ「『14世紀の危機』を問う：文理『融合』ではなく『協働』のために」が開催された。ワークショップのプログラムは以下の通りである。

〈趣旨説明〉

諫早庸一（北海道大学）「『14世紀の危機』とは何か」

〈報告〉

早川尚志（大阪大学）「17世紀の危機と14世紀の危機：太陽活動復元の現状と環境史への展望」

中塚武（名古屋大学）「気候変動の周期性と世界史の新しい見方」

〈コメント〉

四日市康博（立教大学）「モンゴル・インパクト再考」

〈総合討論〉

北海道中央ユーラシア研究会ワークショップ

「14世紀の危機」を問う

— 文理「融合」ではなく「協働」のために —

プログラム

〈趣旨説明〉 15:00～15:15
 諫早庸一（北海道大学）「『14世紀の危機』とは何か」

〈報告〉 15:15～16:35
 早川尚志（大阪大学）「17世紀の危機と14世紀の危機
 —太陽活動復元の現状と環境史への展望—」
 中原武（名古屋大学）「気候変動の周期性と世界史の新しい見方」

〈コメント〉 16:50～17:10
 四日市康博（立教大学）「モンゴル・インパクト再考」

〈総合討論〉 17:10～18:00

入場無料・予約不要

日時 2019年
10月5日（土曜日）15:00-18:00

会場 **北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター
 4階 大会議室（403）**

アクセス

● 人文・社会科学 総合共有研究棟（W棟）から
 W棟の正南玄関を右へ右へ進み
 法学座席を移向します。

● 新風知書館（札幌駅・北5西門方面）から
 新風知書館の正南玄関を右へ右へ進み
 渡り廊下を通り法学座席に接続します。
 ※新風知書館館内は②へ。

・法学座席より2階へ上ります。
 ・法学座席 2階 に、各センターへの接続通路がございます。他から4階へお越しの際は、
 ・各センター2階「新風知書館」またはエレベーターで 2階へ上ってください。
 ※各階の案内に案内板がございます。お迷いなくご確認ください。4階

問い合わせ
 北海道中央ユーラシア研究会事務局
 ezo.eurasia@gmail.com

※北海道大学令和元年度若手研究加速事業「14世紀の危機」についての環境史的考察」

アクセスマップ

写真提供：四日市康博

※駐車場はございません。公共交通機関でお越し下さい。

ワークショップ・ポスター

当日は本州から御来場の方々も含めて30名近くの参加者を得ることができ、あらためて環境史に対する注目度の高さを感じさせられた。このワークショップは、北海道大学令和元年度若手研究加速事業『「14世紀の危機」についての環境史的考察』（代表者：諫早庸一）との共催で実施されたものであり、この研究資金で来ていただいた原田央氏（東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻修士2年）に当日の議論について記録を御願ひした。以下、彼による参加記を掲載させていただく。

参加記

当ワークショップに参加した原田から、各報告の内容を紹介したのち、感想を述べたいと思います。

諫早庸一『14世紀の危機』とは何か』

諫早先生はスラブ・ユーラシア研究センターの助教を務められ、主にモンゴル帝国期の文化交流史を研究なさっています。先生のオープニングトークからこのワークショップは始まりました。

まず諫早先生は日本では馴染みの薄い「14世紀の危機」について説明を行いました。「14世紀の危機」の重要性を理解するための前提として、アプー＝ルゴドが提唱した「13世紀世界システム」と呼ばれる、単一の言語・宗教・帝国に規定されない8つのサブシステムからなるアフロ・ユーラシア規模のシステムが「危機」の前に存在していたことが指摘されます。このシステムを停止させ、西洋主導の新システムへと道を開いたともいえる「14世紀の危機」は世界史を語る上で外せない要素である、と諫早先生は述べました。

その上で「14世紀の危機」については、環境史家のキャンベルによる「大遷移（The Great Transition）」論が紹介されました。その議論においては、1340年代から1370年代にかけて気候変動・社会動乱・疫病流行の三要素の複合によって「危機」が最大化するとされています。しかしながらこの説には異論も出ており、例えばビザンツ帝国史家のプライザー＝カペラーは、14世紀にはかなりの程度にまで縮小を余儀なくされていたビザンツ帝国領域内ですら、地域ごとに環境条件の差は大きく、それへの人間社会の対応は都市ごとに異なっていたことを論じています。それにより、彼はキャンベルの大きな構図に疑問を投げかけているのです。さらに諫早先生は、「大遷移」論のような最新の環境史研究によって、ウォーラステインの「近代世界システム」に見えるような西洋中心主義が再生産されてしまっているというパラドクスにも言及されていました。

このような「大遷移」論を乗り越えて新たな「14世紀の危機」像を描くためにはいったいどうすればいいのでしょうか。この問題に一石を投げようとするのがまさしくこのワークショップに他なりません。こうした学術的背景を踏まえ諫早先生は、非ヨーロッパ世界の知見を含めて「社会のアーカイブス」を読み、それを最新の「環境のアーカイブス」と照らし合わせることの重要性を強調しました。社会のアーカイブスについては人文的アプローチ



諫早趣旨説明

を続けるとして、環境のアーカイブスについては天文学や古気候学の知見をいかにして活用していくか、そこではまさに文理「融合」ではなく「協働」が求められます。ワークショップのタイトルにもあるこの文言についての詳細は感想で述べますが、分野間の対話を行う前にまずはどういった知見が他分野では蓄積されているのでしょうか。太陽物理学と古気候学の最新の研究について、早川さんと中塚先生に発表していただきました。

早川尚志「17世紀の危機と14世紀の危機：太陽活動復元の現状と環境史への展望」

早川さん（大阪大学大学院文学研究科博士課程／ラザフォード・アップルトン研究所宇宙物理宇宙運用局客員研究員）は主に歴史資料からの太陽活動や気候変動の長期トレンド分析を行っていらっしゃいます。

早川さんはまず、過去の文献に残る記述を今の常識に基づいてナイーブに史料批判することの危険性を強調なさいました。具体的に言えば、史料に記述されているものの今の地形と合致せずに史料批判に晒されていた河川流路なども、実際の史料や科学データから裏付けられる事例を紹介しました。

早川さんのご専門である過去の太陽活動の定量的復元は望遠鏡観測で得られた黒点数によって評価されています。このような黒点数は過去400年分データベースに起こされているのですが、その背景にあるのはあくまで同時代の観測記録です。そのため、しばしばデータベースに起こされた数値をそのまま鵜呑みにしてしまうことは大きな危険を孕み、オリジナルの観測記録の解釈に当たって適切な史料批判を行わなければなりません。

いくつかの例をあげます。まず黒点群の分類法の違いによるものです。黒点数の評価に当たっては個別黒点数に加えて黒点群を数えることが重要になります。1720年代に急激な増加を見せる黒点群数は、ロストの観測記録に見える個別黒点数を黒点群数と誤読していたことに起因することが明らかになりました。また他にも無黒点日が年の大半を占める黒点観測が行われたという史料がデンマークにありました。察しの良い方ならもうお気づきかもしれませんが、デンマークは曇りがちな気候であり決して黒点観測に向いているとは言い難く、一つも見えなかったのではなく観測不能だった日が多かったと推定されます。このように黒点観測は異なる分類方法が史料ごとになされていると言ってもよく、統一基準のもと校正を行う必要があります。このような記録の再検討に伴い、17世紀のマウンダー極小期周りの太陽活動の復元は大きく書き換わりつつあります。

では14世紀では史料から何が言えるのでしょうか。こちらについての研究はまだ進行中ですが、元史の災害記録からはむしろ14世紀前期に災害のピークが見られ、14世紀中期から後期を契機とするキャンベルの「大遷移」論と少し時代がずれます。このことを示したのち早川さんは、気候変動がどのようなタイムラグで影響するのか、また災害が気候変動のどのフェーズに起きていたのかを精査する必要があり、それは実際の観測か史料批判にきちんと基づくべきだと述べ発表を締められました。



早川報告

中塚武（名古屋大学）「気候変動の周期性と世界史の新しい見方」

中塚先生は名古屋大学の教授で、古気候学者としてご自身が考案・実践した酸素同位体比年輪年代法を用いて二千年を超える日本の長期気候変動を復元するにとどまらず、それを用いて気候と歴史との関係性について新たな視座を与える研究をなさっています。

まず中塚先生は、歴史事象（例えばマヤ文明の崩壊）に関して、これまでは歴史学の側から古気候データを用いて説明が行われていましたが、逆に古気候データを解析した結果から歴史事象を眺めることによって、気候変動が人間社会に影響を与えたときとそうでなかったときとを比較し、レジリエントな社会とはなんであるかを明らかにできるのではないかと述べました。

そして古気候学の知見として、木の年輪に含まれる酸素同位体比が日本の夏季降水量と高い負の相関を示すことを説明した上で、主に中部日本から得られた年輪データをつなぎ合わせることによって二千年を超える一年ごとの高解像度クロノロジーを得られたことが、上述した気候と歴史との関係性を明らかにする上で重要だと述べられました。

また気候を考えるにあたっては、人の一生の長さである数十年周期の気候変動には対応できないことをトイモデル（ある事象のメカニズムを簡潔に説明するモデルのこと）を用いて説明なさったあと、酸素同位体比クロノロジーと歴史事象との間に見えてくる関係性について多くの例を用いて定量的な指摘をされました。例えば鎌倉幕府が滅ぶ直前の13世紀末に見られる数十年周期の気候変動の振幅が増加するタイミングと文書に記載される「悪党」の語の件数が実に良く一致するのです。



中塚報告

ここまで述べられた上で中塚先生は、重要なのは定量的に全体を俯瞰することであり、一つ一つを見ていくことではないことを強調されました。古気候学者としてできることはより正確な気候データを歴史学者に提供すること、またそれによって得られる相互の知見であり、ぜひ文理協働を果たし14世紀の危機についても新たな輪郭を描き出せれば、と前向きな言葉で発表を終わりました。

四日市康博（立教大学）「モンゴル・インパクト再考」

四日市先生は立教大学の准教授で、モンゴル帝国期の交流史研究をなさっています。この発表は前のお二方の発表を受けてのコメントという位置づけではありますが、簡単にまとめます。

まず四日市先生は「モンゴル・インパクト」という概念を提示します。私には耳慣れないものですが、簡単に言えば13世紀から14世紀にかけてモンゴル帝国がユーラシア各地に及ぼした影響といえるものでしょう。それには二つの側面があると四日市先生は指摘します。一つが短期的なもので政治・軍事的なもの、そしてもう一つが長期的なもので文化・経済的なものです。モンゴル帝国と日本との関わりは元寇ばかりがとりあげられますが、それは一側面にしか過ぎません。

そして四日市先生は、環境と歴史記述の間には社会構造・制度があり、その関わりを無視して語ることはできないと指摘します。on-off や 0/1 が表す二進法に基づく digital な分析だけにとらわれず、史料のもつ偏差的性格を考慮したいわば analog な分析も行うべきだと提案し、発表を締めくくりました。



四日市コメント

全体の感想

当ワークショップは「14世紀の危機」像を新たに描き出すために、文理「融合」ではなく、文理「協働」を目指す、いわば決意表明の場として行われました。その意図するところとして諫早先生はオープニングトークの中で、「融合」とは他分野に踏み込むことであり、それぞれのお作法（＝ディシプリン）をもつ科学者にとって軋轢を生じさせやすい、だから「協働」であるべきだと述べました。また早川さんもご自身の発表の中で、餅は餅屋、自分のできることをなすべきであり、他分野に踏み込んで知ったかぶりをしてはいけなと主張されていました。私もお二人の意見について諸手を挙げて賛同いたします。

文理「融合」と冠して打ち出された政策・カリキュラムは数しれず、そのうちのどの程度が実を結んだのかは定かではありません。事実、こうした古気候・天文を扱う自然科学者と歴史を扱う人文科学者の対話が行われた場に幾度となく居合わせた私としても、「融合」がいかに高い障壁であるかを初学者ながら痛感するところです。

以下私見ですが、文理や各学問領域はそれぞれの目指す目的に対応するため長い歴史の中で分かれるべくして分かれたはずなのです。哲学と社会学のように理由あって袂を分かった分野同士が、ときの流れの中で近づくことこそあれど、旅人よろしくやあやあと再会し意気投合することなどありえません。原理的にありえないばかりか、各分野で培ってきたディシプリンの良さを消すことにもなりかねないでしょう。

では何が求められるのか。非常に浅薄な言葉ではありますが、お互いの分野を理解することにつきると考えています。傍から見れば意味のない拘泥も、ディシプリンに基づくものかもしれません（もちろんプライドが往々にして邪魔をすることを否定はしませんが）。私は、文理「協働」とは中央にある「真実」を知るべく各研究者が違った道具を持ちよってその周りを囲んでいる、そういったものだと考えています。ある人はメジャーをもっている、また別の人はカッターをもっている。メジャーで長さを測ろうとしている人の前で断りなくカッターで切り刻んでしまえば喧嘩がおこるのは必然でしょう。なるほどあなたは長さが大事だと思っているんですね、では先にメジャーで測ってくださいね、終わったら私がちょっと切ろうと思います。大事なのはその一言ではないでしょうか。もちろんこれはただの例ですが、文理協働研究を行う一歩として当ワークショップは、異分野の研究者・学生・学外の方が対話し互いのディシプリンを理解する場たり得たと思います。

近年研究者がタコツボ化した結果ブレイクスルーが起りにくくなっており、「大きな一歩」が失われかけている、という話も耳にします。分野の垣根を超えて多くの研究者が集まるこ

との意義には、個の単位では願うことも叶わなかった大きな青写真を掲げられることにもあるのではないのでしょうか。まさに理想は高く、障壁は低く、なのです。

14世紀の危機をめぐる今回の取り組みは、ユーラシアという広範なエリアを対象とするものです。決して一人の研究者がその手に収めきれような空間・時間スケールでないことは確かでしょう。だからこそ協働が声高に叫ばれるのです。今まで知ることなかったような分野の研究者が集まり、プロジェクトが始まろうとしています。その場に居合わせてワクワクしていたのは私だけでしょうか。

最後になりますが、当ワークショップを嚆矢とする「14世紀の危機」プロジェクトが、東アジアの新しい像を描き出すにとどまらず、文理協働プロジェクトのモデルケースとなることを願ってやみません。

学 界 短 信

◆ スラブ言語学会 (Slavic Linguistics Society) について ◆

2019年9月11日～13日、スラブ言語学会の年次集会がドイツのポツダムで開催された。大変美しいサンサーシー公園の中にあるポツダム大学が会場であった。今回の集会は学会設立以来14回目となる。本学会は2004年に誕生したスラブ言語研究に特化した学会である。設立の中心となったのはインディアナ大学の著名な研究者のスティーブン・フランク (Steven Franks) 氏である。学会によっては、しばしば領域やアプローチを限定する団体もあるが、本学会はスラブ諸語に対するありとあらゆるアプローチの研究者が参加することが特徴的である。年次集会は毎年9月ごろ、大体3日間開催され、会場はこれまでアメリカとヨーロッパが毎年交代して担当している。また、運営も参加もヨーロッパ、アメリカ、ロシアの研究者が中心となっているが、最近では日本、台湾、韓国などアジアの研究者の参加者も増えてきている。学会のウェブサイトによると、会員は259人(2019年10月現在)¹⁾、学会規模は50人～100人程度と揺れがあるが、大体80人くらいが年次集会に参加しているようである。当該領域の世界的な大家から博士論文を執筆する学生などの若手研究者まで、様々な世代の研究者が参加している。規模がそこまで大きくないことから、雰囲気はフレンドリーだと思う。

2016～2019年に私が当学会の理事を拝命したこともあり、2021年にはSRCが中心となり年次集会を北海道大学で開催することになっている。研究の国際化が推進され、研究者・団体の地域的多様性が学界で考慮されるようになった昨今、アメリカとヨーロッパ以外の地域でのこういった国際学会の開催は不自然ではないが、その背景にあるのは、日本のスラブ語研究の国際化が着実に認知されてきたことだと言える。日本の研究者が国際学会で報告、欧文誌で論文を刊行するだけでなく、昨今は研究誌で編集委員として活動する者も出てきたことは、その信頼と評価を表すものであろう。スラブ言語学会の札幌大会は、そういった一連の重要な流れを加速させるのに少なからぬ役割を果たすことが期待される。2020年度はアメリカのインディアナ大学で開催されるので、ご関心のある方は、まずはインディアナで学会の雰囲気を感じてみるのはいかがだろうか。[野町]

1 <https://www.slaviclinguistics.org/membership/member-directory>

◆ 学会カレンダー ◆

- 2019年11月23-26日 51st Annual ASEEEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Convention 於サンフランシスコ
<https://www.aseees.org/convention>
- 12月12-13日 スラブ・ユーラシア研究センター 2019年度冬期国際シンポジウム
- 2020年3月21-22日 2019年度日本中央アジア学会年次大会 於ゆがわら万葉荘
<http://www.jacas.jp>
- 4月1-4日 The ABS (The Association for Borderlands Studies) 2020 Annual Conference 於ポートランド
<https://absborderlands.org/meetings/annual-meetings/>
- 4月3-5日 BASEES (British Association for Slavonic and East European Studies) Annual Conference 2020 於ケンブリッジ大学
<http://basees.org/conferences/>
- 5月7-9日 25th Annual World Convention of the Association for the Study of Nationalities (ASN) 於コロンビア大学
<https://nationalities.org/convention/2020-convention>
- 8月4-9日 ICCEES 第10回大会 於モントリオール <http://iccees.org/>
[編集部]

大学院だより

◆ ゴルバチョフ特任教員による連続講義 ◆

現在センターの外国人研究員をつとめているシカゴ大学のヤロスラフ・ゴルバチョフ氏による2科目の連続講義が、10月2日からおこなわれています。ゴルバチョフ氏はハーバード大学出身のインド・ヨーロッパ比較文法の専門家で、ジェイ・ジャサノフやカルバート・ワトキンスといった当該領域の大家の下で研鑽を積みました。今回は氏の滞在が冬学期全体になるため、これを機に「印欧語比較言語学入門」および「バルト・スラブおよびスラブ歴史アクセント論」(各10回)の特別授業をお願いしました。単位認定などはありませんが、歴史言語学に関心のある熱心な学生が参加しています。[野町]



教室の前にて。今日は何人の学生が来ているでしょうか

編集室だより

◆ 『スラヴ研究』 ◆

第66号は例年よりも大幅に遅れ、多大なご迷惑をおかけいたしました。9月初めに無事発行することができました。第67号には6本の投稿があり、現在査読の段階にあります。[長縄]

◆ Acta Slavica Iaponica ◆

諸事情により第40号の編集作業が遅れており関係する皆様にご迷惑をおかけしておりますが、この7月に投稿締切があった第41号の編集作業を同時に進めております。第41号には12本の論文、4本の書評が投稿され、現在外部査読がほぼ終わるところです。査読者の皆様のご協力で本誌は成立しております。この場をお借りしてお礼申し上げます。[野町]

会議 (2019年7月)

◆ センター協議員会 ◆

2019年度第1回 7月8日(月)

議題

1. 平成30年度支出予算決算(案)について
2. 令和元年度支出予算配当(案)について
3. 大学間交流協定の締結について
4. 部局間交流協定の締結について
5. テニュアトラック制度に関する内規の制定について
6. 研究生の受入(新規)について

◆ センター共同利用・共同研究拠点運営委員会 ◆

2019年度第1回 7月31日(月)

議題

1. 共同利用・共同研究拠点の活動について
2. 共同利用・共同研究公募のあり方について
3. スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員の選考について

[事務係]

みせらねあ

◆ 『ヨーロッパ言語地図の中のスラヴ諸語』刊行 ◆

ドイツの学術出版社の老舗 De Gruyter 社から、論文集 *Slavic on the Language Map of Europe: Historical and Areal-Typological Dimensions* が Trends in Linguistics シリーズの第333号として刊行されました。編者は2009年度に外国人研究員であった Andrii Danylenko 氏と野町です。本書の基礎となったのは2013年度に札幌でおこなわれた国際研究集会ですが、その後

さまざまな研究者と意見交換し、また優れた執筆者を招へいし、地域言語学の視点からスラブ諸語を通時的・共時的に分析した論集で、分析の方法論に関する論文も収録されています。匿名の査読結果では The publication sets standards in the field and will most likely remain relevant for the next years or even decades と評価されました。これが現実になることを編者の一人として祈ります。[野町]



◆ 専任研究員消息 ◆

ウルフ・ディビット研究員は、7月10日～8月15日の間、資料収集のためアメリカに出張。

野町素己研究員は7月11日～7月19日の間、“The Politics of Categorizing Linguistic Varieties” 出席および研究打合せのため、ニュージーランド、オーストラリアに出張。8月17日～9月1日の間、資料収集および聞き取り調査、現地調査のため、セルビア、北マケドニア、コソヴォに出張。9月11日～9月26日の間、“Slavic Linguistics Society” 出席・研究発表のためドイツ、および「国際スラビスト会議スラブ諸語文法構造研究部会会議」に出席・研究発表のためポーランドに出張。

田畑伸一郎研究員は、8月6日～8月25日の間、北海道大学ヘルシンキオフィス管理・運営業務のためフィンランドに出張。9月17日～9月29日の間、聞き取り調査のため、ロシアに出張。

仙石学研究員は、8月20日～8月29日の間、資料収集のため、スイスに出張。

岩下明裕研究員は、8月25日～8月29日の間、“Finland and Japan in the Changing World” 出席・研究報告のため、フィンランドに出張。9月19日～9月23日の間、中露国境地域の現地調査のため、中国、ロシアに出張。10月8日～10月21日の間、アダム・ミツケヴィチ大学で講演および研究報告のためポーランドに出張。

宇山智彦研究員は、9月4日～9月6日の間、“The Russian Approach to State-building: Past and Present” 出席・研究報告のため、中国に出張。9月15日～9月20日の間、現代日本研究講座開設に係る国際交流基金予備調査および講演のため、クルグズスタン（キルギス）に出張。10月9日～10月16日の間、Central Eurasian Studies Society 年次大会出席・報告・討論および講演・研究打合せのため、アメリカに出張。

安達大輔研究員は、9月22日～9月26日の間、日露大学協会総会出席・講演のため、ロシアに出張。[事務係]

目 次

研究の最前線.....	1
2019 年度冬期国際シンポジウム《帝政ロシアの地方再訪：文学的想像力と地政学》開催予告／Border Studies Summer School 2019 開催される／JIBSN 礼文セミナー開かれる／総合博物館展示「ボーダーツーリズム」リニューアル／北極域の持続可能な開発に関する 2 会合が開かれる／専任セミナー／ヤヴォルスカ・オクニンスカ氏の研究滞在／研究会活動	
人事の動き.....	7
事務職員の異動	
中央アジア 1916 年反乱に関する国際共同研究に参加して by 宇山智彦.....	7
「14 世紀の危機」ワークショップから考える文理協働 by 原田央.....	12
学界短信.....	18
スラブ言語学会 (Slavic Linguistics Society) について／学会カレンダー	
大学院だより.....	19
ゴルバチョフ特任教員による連続講義	
編集室だより.....	20
『スラヴ研究』／ <i>Acta Slavica Iaponica</i>	
会議 (2019 年 7 月).....	20
センター協議委員会／センター共同利用・共同研究拠点運営委員会	
みせらねあ.....	20
『ヨーロッパ言語地図の中のスラブ諸語』刊行／専任研究員消息	

2019 年 11 月 15 日発行

編集	宇山智彦
DTP 編集	大須賀みか
発行者	仙石 学
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/
